

10. 遠藤 直人氏（株式会社 YE デジタル 代表取締役会長）

「目指すは『未来型製造業のまち』。ものづくりしやすいという強みを伸ばし、さらには、高齢化先進都市、環境未来都市として、『住みたいまち』へ。



遠藤 直人（えんどう なおと）

（株）安川電機製作所（現・（株）安川電機）に入社。その後、IT部門の分社化で設立された安川情報システム（株）に転籍。取締役営業本部長、副社長執行役員サービスビジネス本部長、代表取締役社長を経て、2022 年代表取締役会長に就任。

「富裕層にも愛されるまち」

私は、当社の会長に就任して 2 年、北九州市に来てからはトータルで 12 年になります。会員となっているロータリークラブの半分くらいは全国企業の支店長・支社長で構成されています。地元出身の方は少ない中、会員は皆一同に「こんないいまちはない」と言います。転勤を繰り返し、他の地域を経験している方々ばかりですが、その方々に非常に評価されている証と言えるのではないのでしょうか。

北九州市民 92 万人のうち、2 万人くらいは富裕層と超富裕層になりますが、北九州市はそのような層も満足できるまちだと思います。小倉北区の都心部は、デパート・スーパー・都市公園・カフェなど、富裕層にとって必要なものがすべて揃っていると感じています。東京や大阪の郊外の富裕層が住んでいるエリアと比べても、北九州市はとてもコンパクトで便利であると感じます。

「高付加価値のビジネスが成り立つまち」

四季ごとにきれいな城の景色を見ることができ、食べものについても、圧倒的に美味しいものを、東京よりもはるかに低廉な価格で食べることができます。その一方で、北九州市の料理人は 2 万円前後の客単価のもと、厳しい世界

で腕を磨いている方もいます。あえて、20 人から 10 人に席数を減らし、客単価を増やしても、リピーターに支えられている。実はそのような高付加価値のビジネスも通用するまちなのです。

「交通に強いまち」

交通に関しても非常に便利です。もし、欲しいものが北九州市で揃わなければ、北九州空港から容易に東京に行くことができます。また、新幹線も東京へのアクセスには苦勞しません。逆に、北九州市をシニアタウンとして、東京からのアクセスも容易であるということです。

他方、北九州空港については貨物空港として 24 時間体制で運用してもよいかもしれません。製造業と機械産業をはじめ、三交代勤務が得意なまちという長所を無理なく伸ばして欲しいと思います。やはり製造業のまちで大きくなって欲しいという思いを持っています。

「情に厚く、よそ者にあたたかい」

市民の気質としては、非常に情に厚いと感じます。自分がロータリークラブに加入した時も、新参者の私を受け入れてくれました。商工会議所に入ったときにも、部会長が一生懸命相手をしてくれました。受け入れることに慣れている

ともいえるかもしれません。

「環境や高齢化を生かした未来のまちへ」

人口減少は、他のどの都市でも迎える現象です。これらを逆手にとって、高齢化先進都市や環境未来都市として、未来をつくっていきたいと思っています。そこで自分が考えている大きな構想を2つ紹介したいと思います。

1つ目は「シニアの集まるまち・北九州フロリダ構想」です。

米国フロリダは、気候変動が少なく、とても住みやすい場所であり、高齢者が住みたいまちとして認知されています。北九州市にフロリダのような場所をつくるとすれば、若松区が最適なのではないかと考えています。

若松区は、自然や野菜・果物や魚介類といった食、アクティビティも魅力的で、高齢者が住みたくなるようなまちの要素を持っています。加えて、壮大なビオトープといった自然共生の場もあれば、グリーンパークといった大型緑化公園もあり、非常に可能性を秘めたエリアではないでしょうか。若松から空港まで、鉄道を通すというのも面白いかもしれませんね。

2つ目は、「フルカーボンからゼロカーボン都市へ」です。

北九州市はかつて、石炭の積み出し等石炭産業で栄えた、言わば「フルカーボン」の都市でした。しかし、今では未来に向けて、洋上をはじめとした風力発電産業の形成にも力を入れていますし、EVの工場もできます。このように「ゼロカーボン」を目指し、北九州市の「環境」という強みを生かした新たな産業を作っていくことが必要ではないでしょうか。

人々の生活スタイルのレベルにおいても、小倉北区の旧電車通りを自動運転のみ運転可能として、家に駐車場を持たなくてよいまちをつくるといったことも夢があると思います。自家用車はサブスクリプション制、使いたいときに自動運転で自宅まで来るような設計にし、通勤

用と家庭用を使い分けるといような運用にしても面白いのではないのでしょうか。使用する車もEVを活用し、空いている駐車場で充電するなどにより、「所有」ではなく、「シェア」するようなまちになって行くイメージです。小倉はかつて路面電車が走っていたので、そのようなスタイルもしっかりくる気がしています。自動運転を危ないと捉えるか、チャレンジと捉えるか。チャレンジと捉えることで、良い発信となっていくのではないのでしょうか。

「未来型製造業のまちになってほしい」

北九州市は理系のまちであり、テクノロジーに親和性があります。これからも製造業は捨てず、私自身も製造業の従事者の人たちが根付くまちにしたいと思っています。「ものづくりは北九州市がやりやすい」と製造業の方々には思ってもらいたい。未来のエネルギーや未来の製造物を作るようなまちになればよいと思います。反対に、製造業をそれ以外の別のものに完全にシフトさせることは難しいのではないのでしょうか。いいところを伸ばしていくことが大事です。得意分野の製造業で大きくなり、住みたいまちになってほしいです。

1.1. 大久保 大助氏（特定非営利活動法人 KID's work 代表）

「北九州市は人が育つまち。課題に対して、皆で解決していこうという雰囲気がある。」



大久保 大助（おおくぼ だいすけ）

北九州市出身。

子ども・若者の「考える力」「決める力」「行動する力」を育むことを目的に、市内で、キャンプや通学合宿などの体験活動を実施。行政や諸団体との協働事業やボランティア関連、子どもの体験活動等に関する講演や研修、まちづくりセミナーの講師、子ども向けの防災講座や地域での防災の講座や訓練、地区防災計画の策定などにも関わっている。

「青少年育成に取り組むきっかけ」

私が体験活動を始めたのは、中学3年生の時。北九州市の青少年課が主催したキャンプに参加したことがきっかけです。高校時代は、野球部に在籍していたため、キャンプとは縁遠い生活をしていました。実は、高校2年生の時に青少年課からキャンプリーターとしてのお誘いをいただいたのですがその時は行けず、高校を卒業してから、市政だよりで「ボランティア募集」の記事を見て、今度はスタッフ側としてこの世界に足を踏み入れました。

「子どもから若者への成長を見守る社会を」

以前は、市の「少年自然の家」の活動や、町内の「子ども会」も活発で、家族以外の大人たちや、年齢の異なる人たちに出会う場もたくさんありました。しかし近年、自治会の存在価値や地域でつながる意味も、ますます薄れつつあります。地域の行事に参加し、声をかけあう。そんな環境の中で、いろいろな方々に見守られ、認められていることを感じながら成長していくという意味は大きいと思います。

ボランティアや市民活動については、大学生や20代前半で興味を持ってくれる若者もいますが、数は多いわけではありません。また、一定時間以上ボランティアをすれば、単位になるという理由で参加する学生さんもいますが、そ

れを目的とした参加には違和感があります。

「コスパ（費用対効果）」や「タイパ（時間対効果）」などの合理的な考え方が主流になっている今だからこそ、「子どもから青年に育っていく過程を社会が見守る」ということがより一層必要になっていると思っています。

「みんなで課題に対し考えることができる」

一時期海外にも身を置いていましたが、北九州市に戻ってきておもしろいなと思うのは、いろいろなことが良い意味で「ごちゃごちゃ」しているところ。加えて「都市だけれども田舎」いう点も好きです。

まちを構成するのは「人」ですが、北九州には様々な分野の様々なプレーヤーがモザイク的にいます。何か困ったことがあると、みんなでもうにかしようとする雰囲気があります。

また、いい意味の「隙」もあるので、「よそ者」が入る余地がある。課題に対し、一緒に考えることができる基盤がある。そのような取り組みをしてきた先人の歴史もある。市民活動の分野でもできることが多いと感じます。

北九州には課題もたくさんありますが、それもポテンシャルだと言えます。課題を単に困ったこととして捉えるのではなく、取り組むべき共通項として捉えることで、みんなで考えるためのリソース（資源）になるからです。重要な

ことは、その課題に対して、市民活動はもちろんのこと所属や立場を越えて意欲ある人たちが一緒になって取り組むことだと思います。

「人が育つまちであってほしい」

北九州市に願うのは、やはり「人が育つまちであってほしい」ということです。人を育てようとする意欲を持ち、かつ具体的な行動が伴うことで人が育つ場は作れると思います。

北九州市には、大学が多くありますが、就職による市外転出が課題と言われています。しかし、出ていくことを問題と見るのではなく、縁あって北九州で過ごした若者に、「北九州で学べてよかった」と思ってもらうことに注力するのもひとつです。人を育て、他都市に送り出すことができれば、北九州市に親近感を持つ「北九州ファン」を市の外側にもつことになります。

人口の減少する時代に、敢えて北九州市は「いい人材を輩出していくまち」となれば、まちの新たな価値が生み出されるし、そんな北九州に魅力を感じて、北九州に居続けたいと思ったり、北九州で暮らしたいと思ったりする人も出てくる可能性もあるのではないのでしょうか。

「地域に愛着を持った若者を育てるために」

北アイルランドで暮らしていたときのことです。友人と話しているときに「あなたの国ってどんな国？」と聞かれたことがありました。そのときに浮かんだ「日本」は、皿倉山、工場、煙突からの煙、貨物船、洞海湾、若戸大橋でした。どれも、子ども時代に遊んでいた八幡東区枝光から見ていた風景です。いつの間にか、自分が地域に愛着を持っていたことに気づいた瞬間でした。

子ども時代に家族以外の地域の人に声をかけてもらったり、手をかけてもらったりした経験は、地域への愛着につながると思います。北九州市には、海も山もあり自然が豊か。さらに、子どもの育ちに関心を持ち取り組む人たちも

たくさんいます。こうした特長を活かして、地域全体で子どもたちを育てていきたいと思っています。よい子ども時代を過ごすことで、その地域がその人のふるさと(=帰ってくる場所)になると信じています。

「古き良きものは残してほしい」

「古き良きもの」は、残してほしいと思います。例えば東田第一高炉は、私にとってふるさとの風景のひとつですが、子どものころに解体の話が出たことを記憶しています。しかし、そのとき残そうとして動いてくれた方々がいたおかげで、今もその姿がそこにあります。

こうした北九州の「古き良きもの」は、建物だけでなく、地域の風情や人の価値観などにも感じます。「不易流行」。古いものの保存は本当に有難いと感じていますが、未来に残すべき大切なものは、この東田第一高炉のように残していけたらと思います。

「自分が一番になれる土俵を探すこと」

現在わたしは、NPO 法人の代表として子ども・若者のための体験活動をしています。小さな団体ですが、仲間と共に大事にしていることは「人と同じことをしない」ことです。他の団体との差異化を図り、新しい価値を創り出すためには、思い切って振り切って突破口をつくる必要があります。他のものと比べるのではなく、新しい価値を創り、一番となる土俵を探すようにしています。

そして、それは北九州市に対する想いでもあります。2023年現在、政令指定都市のうち人口減少率が1位の北九州市ですが、増やすことだけが正解ではないと思います。例えば、「高齢化が進んでも住みやすいまち」「人口が減っても適応できるまち」など、新たな土俵で日本一になれるように、北九州の魅力をさらに高めていくのも素敵じゃないでしょうか。

12. 大迫 順平氏（九州朝日放送株式会社 取締役）

「チャレンジする、できるまちへ。そして、市民が誇りを持って成長できるまちに。」



大迫 順平（おおさこ じゅんぺい）

北九州市出身。

九州朝日放送(株)に入社後、ANN ソウル特派員、「アサデス。KBC」プロデューサーを経て、社長室長、総合編成局地域共創 GP 兼社長室地域戦略担当を歴任。

2021 年に取締役、2023 年 4 月から地域共創、経営企画、人事労務担当。

北九州支社でも勤務経験あり。

「ソフトによるものづくり産業の変革を」

北九州市で 18 歳まで育ちましたが、「無いものは無い」都市だと思います。やはり、ものづくりがしっかりあるのが強みでしょう。福岡市とついつい比較してプライドを持ってないと言われますが、「北九州に生まれてよかった」とプライドを持てるようなまちに、今後変わっていくことができる可能性は十分にあるのではないのでしょうか。

強みである「ものづくり」について、今やソフトで動く時代です。ソフトを意識し、強い産業へと変貌・成長させていく必要があります、強い企業が必要です。国内外トップの IT 企業などと組むことによって、世界に誇れるようなソフトを創造して行ってほしいと思います。また、将来の発展に向けては、新しいソフト企業の誘致や育成を通じて、自身のまちの企業で働き、稼ぐという視点が必要になります。

その素地はあると思いますので、九工大や高専など教育機関を生かしながら理系に強い人材を育てていくことが大事です。

チャレンジできる環境やそれらを支える子育て政策を打ちだしているのです、今後ももっとチャレンジできるようなまちづくりを期待します。

「スポーツによるシビックプライドの醸成」

「ギラヴァンツ北九州」に代表されるように、短期的にはスポーツ強化はプライドの醸成につながる、市民の心を一つに出来る取り組みです。かつて小倉高校が甲子園で優勝したように高校スポーツの強化もその一つですが、課題は生徒数の減少です。人口減っているにも関わらず、高校の数は変わっていないため、各校の定員が少なく、運動部のレベルもバラつきが出ることであり、高校スポーツ活性化の観点からも何らかの検討が必要になってくるのではないのでしょうか。

「みんなが広報マンとなり広報の一翼を」

北九州市は市内外へのアピールが得意ではないように感じます。良いものがあっても届けること、伝えることができなければ意味がありません。メディアが多様化する中、取捨選択ができず情報が埋没しているように感じます。

スマホ時代である現代の情報発信は、アップするだけでなく、対象に届けるためのテクニックがなければ、いい仕事をしていても届きません。非常に大事なポイントです。

市の職員、まちの皆さんが発信に力を入れていき、「市民みんなが広報マン」として広報の

一翼を担うという意識を持つことが重要です。この意識はキャッチフレーズ一つで変わってくることもあるのではないのでしょうか。

その中で、2021年10月に開催された世界体操・世界新体操」は北九州市の良いPRの機会となりました。当時トップ選手であった内村航平氏が北九州市の生まれであったことが非常に大きかったと思います。こうした北九州市の魅力発信が一過性にならないように、仕掛けを次々に打っていくことが大切です。

「市民がワクワクするような夢やビジョン」

アジアに近い北九州市には優位性があり、北九州空港というインフラは活かす必要があると感じます。

これに関連して、大分県では、宇宙ビジネスに力を入れています。北九州市においても、かつて「スペースワールド」があった経緯もあり、宇宙ビジネスは身近で、重要な産業になってくるのではないのでしょうか。必ず成長する産業であり、夢もあるので、この分野で存在感を示せる可能性は十分にあるのではないのでしょうか。将来欠かせない分野になってくるので、国と連動しながら発展させていってほしいと思います。

「スペースワールド」は、我々にとって非常に大きなインパクトがありました。宇宙が遠いものではなく、身近に感じ、親しみやすい印象を持つことができました。この点に着目し、政策として打ち出していても良いと思います。「ワクワクすること」、これがキーワードとなるでしょう。市民を奮起させる夢やビジョンが大切となってくるのではないのでしょうか。

「チャレンジする若者を応援する環境を」

若者が魅力を感じて働ける企業や職種が北九州市には少ないと感じます。例えば弊社主催の男子プロゴルフの大会に協賛頂いている名刺管理アプリ開発の企業は新しいですが、発想

がユニークで、実に元気があります。そのような企業が北九州市で生まれても全くおかしくなく、魅力ある企業がもっともっと出てくることを願っています。

今後は、若者が起業する、新興企業でチャレンジする場を創っていくことが必要で、行政としても支援することが重要ではないのでしょうか。併せて、変化が激しく先の読めない時代ですが、チャレンジする若者を応援する風土の醸成も必要でしょう。そのようにチャレンジできる環境を整えることが、稼げるまちをつくる土台となると考えます。

メディアとしては、それを知ってもらったり、ピッチイベント等で投資を促したりということができないのではないかと考えています。

チャンスの場、マッチングの場の創出により、東京に行かなくても起業できる環境を、行政とメディアが連携しながらつくっていったら良いですね。まだまだ追いつける分野だと思います。

「チャレンジする・できるまちへ」

「夢と希望と感動」、感情を揺さぶられるものがあるから、「居たい」「働きたい」と思うはず。使い古された言葉かもしれませんが、一周回ってそこに戻ってくるのではないのでしょうか。

また、自分たちに誇りを持ち、成長できるまちになってほしいと思います。ありきたりなのではなく、他にないような、突き抜けた「チャレンジ」、「アイデア」が必要で、個性を出すことが重要です。

尖らせ、突き抜けたものを打ちだしてほしい。北九州市が話題になって、きっと北九州市民のプライドの形成につながっていくこととなるのではないのでしょうか。

「チャレンジするまち、チャレンジできるまち」の実現に期待しています。

1.3. 岡 秀樹氏 (株式会社 HOA 代表取締役/一般社団法人まちはチームだ 代表理事)

「大実験都市・北九州市として、創造的アプローチで行こう！」



岡 秀樹 (おか ひでき)

北九州市出身。豊橋技術科学大学建築都市システム学卒。ロンドンにて工務店事業展開後、日本にて設計・建築コンサルティング業を開始。

2014 年コワーキングスペース秘密基地等を設立。2019 年、観光事業開始。小倉城指定管理者として新規事業創出等を担当。

2022 年、DISCOVERY coworking 設立、指定管理主管：TEAM 城下町小倉代表。

「変革をポジティブに受け止める準備を」

「ヒーローズ・ジャーニー」とよばれる物語の形式があります。主人公が冒険に出て、試練に直面するもこれを制し、成長して故郷に帰還する、という物語の形式です。世界中で広く見られ、日本では「桃太郎」などが有名です。英雄伝説の多くがこの形式になっていると言われています。この主人公は、当然「人」ですが、これを「都市」と見立てるのも面白いのではないかと思います。北九州市は、近代において目覚ましく発展した都市ですが、現在ではインフラの老朽化など、あらゆる分野において更新が求められるという試練を経験することになりました。これまで存在していなかった課題に直面することになるため、過去の実績や事例にとらわれることなく、創造的な解決方法が求められます。そもそも課題の設定がどうであるかを考えたり、問題の枠組みを考え直したり多くの検討が必要です。何よりも関わる人々の意識の変革が重要ですが、既存の体制において浸透できず、具現化に時間がかかる可能性も十分あり得るでしょう。これもまた試練の一つと言えます。

「危機的な状況で平常時の人選を行うべきでない」

危機的な状況にもかかわらず平常時の体制で臨むと致命的なミスをしやすくなります。

組織を柔軟に変えることがベストですが、日本社会においては、危機的状況でも平常時のルールを適用してしまうケースは多くみられます。既存の組織や関係者との摩擦を恐れ対処が後手に回ってしまうこともよくあります。

私の組織では、プロジェクトチーム型の体制を整えていて、臨機応変にチームを組み替えられることで良い成果が出ています。ちなみに、私たちのまちづくり会社は「まちはチームだ」という社名ですが、名前の由来は、既存の「まち」という概念を「チーム」として捉え直し、課題解決のための参加者として見立ててみよう、という趣旨から命名したものです。目指したのは、都市の問題解決を行うプロジェクト的な組織。社内の人も、社外の人（いわゆる外注と呼ばれる方々）ともいって、分け隔てなくチームとして働いています。これにより社員の能力を超えた成果を出せています。北九州市には指定管理者制度などがありますが、今後は全分野において、民間を積極的に活用すると良いと思います。

「共通のビジョンを見るための準備が大切」

プロジェクト型の組織は、課題解決に最適です。但し多様なバックグラウンドを持った人たちですから、共通言語の存在が欠かせません。私たちの組織では、教育プログラムがありますが、これにより意思決定～アクション

までが非常に早くなります。また目的の浸透のために必要なスキルは、ファシリテーションスキルなどが挙げられます。多様性を力に変えられている組織は、総じて、共通概念の構築と浸透の文化が整っていると思います。

「小倉城の成果」

私が代表を務める一般社団法人まちはチームだは、小倉城等の運営管理を行っています。2024年は64年ぶりに23万人を超える入城者数を実現しました。コロナが終わったことやインバウンド需要による成果だとお考えの方も多いかもしれませんが、そう簡単でもありませんでした。なぜならば、かつては写真を撮って帰る人ばかりの施設だったからです。実際の私たちの仕事は、なぜ天守閣に上がらないのかといった調査や、優先順位を設定しなおすことでした。顧客のニーズからサービスを一つ一つ改善して入場者数を増やしたのです。

このように観光ビジネスは、課題を設定し、それを解決する形で発展させます。いわゆるマーケットイン型（顧客の声を聴き、それを解決する）のアプローチです。北九州はモノづくりの都市として発展してきましたので、プロダクトアウト型（良い製品を作り市場投入する、いわゆるモノづくり企業的）のアプローチの方が一般的な気がしますが、観光産業は異なるということについて、もっと認知されるべきだと感じています。

「注目の北九州の寿司ブランド、観光は面的にあるべきだが」

観光は、都市間競争でもあります。そのため、どの都市にも負けないブランドを作っていくか悩まなりません。最近では「北九州の寿司」のブランド向上を目指し、魅力向上委員会を立ち上げました。北九州は日本海のみならず、瀬戸内海にも面しています。そのため近海でとれる魚種は福岡市よりも豊富です。この「北九州の寿司」ブランドは、これから大きく飛躍すると考えていますので、ぜひ注

目していただきたいところです。このように食の魅力は観光に資するものであり、あらゆるものが連携されていくべきですが、現在、北九州市は縦割りの行政管轄になっていて、連携が取りにくいケースもあります。例えば、小倉城と観光案内所は、同じ小倉で、密接に連携すべき施設ですが、異なる管轄のため、思ったように連携できない状況もあり今後改善が望まれます。

「令和版『所得倍増計画』・AIを活用し『稼げるまち』の具現化を」

観光産業もそうですが、これまであまり重要視されていなかった分野こそ連携を拡げ、産業の醸成にチャレンジすべきです。特に「ものづくり×AI・IoT」を進めることは、サービス業においても適用しやすく、他の都市よりもイニシアティブをとりやすいと感じます。ここで「稼げるまち」を考えるならば、間違いなくAIの活用は不可欠です。AIを使えば1人で3人分の仕事をこなすこともできます。1人で3人分の仕事をこなすわけですから、2人分の給与を得てもおかしくはありません。私はこれを「令和版・所得倍増計画」と呼んでいます。従業員も会社もWin-Winです。AIの普及する今こそ「稼げるまち」は実現可能だと思います。

「難しい課題ほどワクワクする！」

「ヒーローズ・ジャーニー」の物語では、試練のことをイニシエーションと呼び、最後に、圧倒的な成長を得るために必要な経験であった、という結論に至ります。多くの人々は、何事もない平常時な世界を望むとは思いますが、残念ながら試練の時に居合わせてしまったわけですから、開き直ってどんと構えなければなりません。むしろ、今生きているのだという実感が得られ、かえって楽しいではありませんか？難しい課題程、腕がなるというものです。同じ困難な時代を生きる者どうし共にチャレンジしようではありませんか？

1.4. 小笠原 浩氏（株式会社安川電機 代表取締役会長）

「世界の人々が住める、安全・安心かつ海外からも注目が集まるまちに。」

未来を見据えた一步一步の取組みが重要」



小笠原 浩（おがさわら ひろし）
愛媛県松山市出身。
九州工業大学情報工学科卒業。
1979年（株）安川電機製作所（現（株）安川電機）に入社後、インバータ事業部長やモーションコントロール事業部長などを歴任し、2016年社長就任。2023年から会長職に専念。

「安全なまちとなった今を未来へ」

北九州市は、炭鉱から石炭、石炭から製鉄と発展し、その中で公害を克服してきた歴史がありますが、今後、過去のことに縛られず、将来志向で物事を考えていったほうが良いのではないかと考えています。

また、その中で、北九州市が「安全なまち」になったことは、将来の発展を考えると非常に大きな転換であったと思います。今後は、安全・安心をベースに未来に向けて引き継いでいくべきだと思います。

『安心なまち』としてのブランドづくり

「安心」には、安全に加え、「ブランド」が不可欠だと考えています。企業目線で考えると、海外と比較してそんなに「良いもの」をつくらせているのか。製品100個のうち、壊れるものの数を比較した時には、そんなに大きな差があるわけではないと思います。購入に差異が出る要因としては、その「差」への着眼よりも、やはり「ブランド」ということではないでしょうか。今後、北九州市において、「安心」のブランドをどのようにアピールしていくのが重要で

「1区1名所1名産のブランディング」

ブランドづくりにおいて、北九州市は5市対

等合併を行い、現在5区となっています。それをどのように生かしていくべきかには、2つ考え方があります。

1つは核をつくる、つまりは小倉を中心とした市をつくるか、もう1つは「1区1名所1名産」という形で平等にブランディングを行うかだと思います。

やはり、1区1名所1名産という形でブランディングを行った方が、インバウンドで捉えても「5か所回ればよい」となり、非常に分かりやすくなるのではないのでしょうか。

海外や東京のように、各名所にターゲットを絞って市バスを巡回させ、停留所も名所に合わせるのはどうでしょうか。

「海外からも注目を集めるまちへ」

安全・安心をベースに、将来目指してほしいのは、日本の政令指定都市で外国人比率が一番高いまちです。高度人材と呼ばれるような外国人に来てもらえるよう、魅力のある都市にならなくてはなりません。

その際注意しなければいけないのは、無理に人口を増やさないことです。今後のビジョンでは、人口増に資源を投資するよりも、所得別の人口構成をどのように入れ替えるかという視点が重要なのではないのでしょうか。

「インバウンドのビジネス層の来訪を」

名所としては、インバウンドのビジネス層の取込みも見込んで、観光名所に加え、産業名所を配置するのも良いかと思います。

さらに、インフラが整備され、医療もあれば、来訪するインバウンドの層のランクはさらに上がります。会社の経営者などの富裕層に、産業技術見学に併せて病院にも来るというようなモデルも考えられるのではないのでしょうか。また、今の時代、リピーターと口コミで人が来訪するので、福岡や大分と結び付け多くの人に来てもらうようなことも考える必要があるでしょう。

海外では、長期の仕事で渡航し、そこで観光・文化に触れるというのは普通の取組みです。そういった時間に、「どのように名所に来てもらうのか」を考えていかなければいけません。

「北九州市にプラスとなる企業誘致を」

北九州市にとって、企業誘致が必ずプラスになるとは限りません。市場飽和している分野に同種企業を誘致すると、競争が激しくなり、企業同士が疲弊していく可能性があります。

しかし、輸出産業を持っている企業であれば、北九州市にとっても利益になります。市にとって利益を生む企業であるかといった視点が重要となってくるでしょう。

「『稼げるまち』にむけて」

「稼げるまち」にするためには、マイナンバーカードの活用やキャッシュレスの普及が重要です。これによってスタートアップの利益が上昇するでしょう。最初抵抗はあるかもしれませんが、海外では賄賂や脱税を排除するためにキャッシュレスが進んでいることなどを踏まえると、徹底的にキャッシュレスを進めることで税収も増えていくのではないのでしょうか。

「『選ばれるまち』に向けたブランド化」

わが国で生活に欠かせない 3 要素として思い浮かぶものは「衣・食・住」ですが、都市のステータスを上げることを目指すと「住・食・衣」の順位になると思います。すなわち、住環境を整えることが重要になります。住環境が安定し、食がキャッシュレスとなっていけば、店がきちんとブランド化され、安いことが価値になりすぎない都市になっていくと思います。そうすれば良い事業が残り、第 3 次産業が安定します。

また、北九州市には病院などの生活に必要なインフラが揃っています。選ばれるまちというのを意識しながらまちをつくっていく。長い話で考えて一步一步進んでいくのが重要ではないのでしょうか。

「やる気のある人に意味のある投資を」

法制度等で難しいとは思いますが、北九州市の産業発展を目指すのであれば、単年度予算の補助金ではなく、きちんと回収できるようなフォローの仕組みが重要だと考えます。

例えば、スタートアップ事業者が事業立ち上げにあたり、通常、自ら銀行から借入します。事業に全体では利益不利益は出るとは思いますが、「店舗を新しくする」という経費が必要な場合、目的を確認した上で、その金額分の補助金を支払うというシステムはどうでしょうか。借入れは行いますが、使った分の経費は戻ってくる形にすれば企業の成長が見込めます。事業遂行できなくなった場合も、負債部分については本人ではなく、市が補助を出し、事業自体は別企業に承継させるというシステムを創れば、やる気のある人は本気になり、強い企業が残っていくのではないのでしょうか。

現行の補助金システムでは、事業がどのような形であれ、継続支援という形になりません。新規事業を始める人にとって、本質的に意味のある投資が必要であると思います。

15. 岡田 芳正氏（日鉄エンジニアリング株式会社 執行役員）

「地方—日本—アジアのハブとして、人—もの—情報がつながる産業のまちを目指す。」



岡田 芳正（おくだ よしまさ）

1966年生まれ。1991年 新日本製鐵（株）入社、エンジニアリング事業本部（東京）で建築設計に従事。1999～2011年 同社九州支社（博多）、北九州市八幡東田地区の再開発に参画。2011年～日鉄エンジニアリング（株）（東京）。2021年 執行役員。

2023年4月～ 同社環境・エネルギーセクターエンジニアリング本部長として北九州市在勤。

「時代に応じて変化してきたまち」

北九州市は、かつての筑豊炭田により石炭産業が栄えたまちで、門司港を起点とした物流・人流の結節点として、わが国の経済発展に貢献してきました。70年代には公害が問題となりましたが、それを克服以降、エコタウンをはじめ、環境のまちとして発達してきました。

このように、北九州市は、産業の交代をまちづくりや新たな産業の発展のきっかけとしてきた歴史があります。

また、5市合併によって、多様な人、文化、歴史、自然を有する点も北九州市の特徴です。例えば、戸畑の提灯山笠や小倉の祇園太鼓など、それぞれの地域の魅力的な文化が引き継がれている他、門司や若松などの個性的で豊かな自然が残っています。

多様な人々が集い、時代に応じた変化を生み出しながら成長してきたのが北九州というまちであると言えます。

「産業を支える環境が充実」

博多が商業のまちであるとする、北九州はものづくりのまちであるとは言えるのではないのでしょうか。

製造業のまちとして発展してきた経緯もあ

り、北九州市は陸海空の物流・人流機能が充実し、産業を支える環境が整備されています。さらには、魅力的な自然、歴史、食文化など、働き住むまちとしてのポテンシャルも有しています。

現在の北九州市は、製造業（素材、自動車、ロボット）や情報産業（コールセンター、データセンター）の集積の他にも、リサイクル産業をはじめとするエコ産業が集積した都市となっています。

製造業のみならず、こうした新たな産業の発展を支える環境が整備されているところが、周辺の都市にはない北九州市の強みであると思います。

「最先端をゆくまちであってほしい」

北九州市のこれまでを振り返ると、産業の生まれ変わりを経験しながら、まちのあり方を変えてきた、進化しながら社会の先端をゆくまちであるというイメージを持っています。

これからも北九州市が最先端をゆくまちであるためには、研究開発機関の充実や、そのような機関から生まれたスタートアップ企業などを育成したり、誘致したりすることが重要であると考えます。

例えば、世界的な潮流を踏まえると、「カーボンニュートラル」は、まちづくりの重要なキーワードの一つになると思います。北九州市ではこれまでも洋上風力発電やごみ廃棄物発電、バイオマス発電など、カーボンニュートラルの取組を進めてきた経緯があります。そうした取組が「最先端のエコタウン」の実現に向けた足掛かりになるのではないのでしょうか。

「人—もの—情報がつながる産業のまち」

北九州市は、現在も変わらず関門海峡に面する九州の玄関口であり、九州内の熊本方面・大分方面を結ぶ結節点となっています。

さらには、日韓海底ケーブルにも象徴されるように、アジアとの距離が非常に近い点も北九州市の特徴です。

先に述べたように、北九州市はそれぞれの時代の状況や社会課題に応じて、産業やまちのあり方を変化させてきた歴史があります。

地方—日本—アジアの地理的なハブとして、人—もの—情報の結節点となり、新たな産業を生み出すまちとして、北九州市が発展していくことを期待しています。

16. 岡野 武治氏（岡野バルブ製造株式会社 代表取締役社長）

「産業をアップデートし、経済も文化も強い、若者が集まるクリエイティブなまちに」



「ものづくりを越えて川上へ」

当社が立地する門司を含む北九州市には元々産業があったわけではなく、歴史的経緯の中で工業化を「経由」したまちだと思っています。地政学的にも官営八幡製鐵所が建てられたことが大きな転換点でした。

ものづくりのまちとしての北九州市はここ100年の話です。抜本的な変化を求めるのは難しい一方で、今後も現在のものづくりのままで生き残っていくのは厳しいと考えています。最先端の新しい技術、サービスを生み出していくのなら良いのですが、単純に「ものをつくる」という発想のまま行くと、川上の産業にはなることはできません。

北九州市は変化への受容性が高いまちだと思いますし、そこは残すべきです。ただし、それがまちの持っているポテンシャルと言えるかは、しっかりと考えなければなりません。

これまで先端のものづくりができるのは欧米と日本などに限られていましたが、今は、途上国の発展もあります。ものづくりに意識を向けてしまうと、彼らとの価格勝負になってしまいうでしょう。

今は、良いものをつくっても売れない時代です。プラスアルファで欲しいもの、価値があるものにするにはマーケティング、宣伝広告、デザインが必要になってきます。よく比較対象と

岡野 武治（おかの たけはる）

北九州市出身。

上智大学経済学部卒業後岡野バルブ製造入社。設計部門、メンテナンス部門(福島第1原発)、製造部門、営業部門、管理部門、企画部門に従事、取締役、常務取締役を経て、20年2月代表取締役社長に就任。

なる福岡市は商人のまちで、そのあたりが上手だと感じます。北九州市はそれを表層だけで真似するのではなく、アップデートすることが必要となってくるのではないのでしょうか。

「産業のアップデートが必要」

北九州市がこれから0→1で何かを作るのは難しいかもしれません。ものづくりの素地はありますが、最先端かと言えば疑問符がつくところです。しかしながら、マーケティングやデザインのような新しい要素を組み込むことができれば、このまちも変わることができるのではないのでしょうか。

ものづくりの側面で言うと、それに固執しすぎずにアップデートすると良いでしょう。「次の産業をこのまちに導入するには」を議論すべきです。特異性のあるものを目指しないと、他の地域に勝てません。産業だったらこれ、文化だったらこれ、というように、それに値する規模で取り組むべきです。

「若者は『稼げる・楽しい』を求めている」

「経済力」+「人」。「人」については、若い力がないとまちは廃れる一方です。本社を置く門司も高齢者が多く、若者が出て行っています。良い人材を育成しても、北九州市から出て行ってしまうので、戻ってくるまちにならなければ

なりません。そのためには経済性・将来性のある産業が必要です。産業では北九州市はDXに注力しているので、ITとロボティクスをとがらせることができれば良いと思います。また、やっつけて「楽しい」という状況も必要で、昨今は、生きていくために仕事をするというよりも、夢や達成感を持てる仕事をしたいという人が多いと感じています。

「クリエイティブなまちを目指す」

若者には視野を広く持ち、外で手に入れたものを持って帰ってきて欲しいです。またそれ以外の人にもこのまちに来たいと思わせないとはいけません。そのためには経済性だけでなく、文化面のアピールも必要です。「楽しさ」を生むのは文化です。20~40代が楽しめるまちをつくっていくべきです。北九州市は映画に注力していますが、音楽やファッションなど人を引き寄せるような文化力が都市には必要でしょう。

北九州市は新しいことにどんどん挑戦すること、それを許容し、バックアップするまちになると良いと考えます。成長を実感でき、大小含めて、クリエイティブな変化が起こるまちにすることが大事です。様々な海外の事例を見てきましたが、成功しているまちは経済と文化で色を付けている。あるいは文化自体を産業化している。文化で言うと、先述したように若者が魅力を感じる「音楽」「ファッション」や「料理」や「食」に可能性があると感じています。

あれもこれもではうまくいきません。きちんと継続的な活動の中で成果を出していくことが大事で、パフォーマンス的なところに終始すべきではないでしょう。割くことができる資源も限られているなかで、絞ってやるのが大事です。是非、クリエイティブなまちを目指して、

取り組んでいってほしいと思います。

「私欲ではない地域貢献を」

北九州市民は、比較的私欲で動く人が少なく、公のために何かをしようという人が多いと感じており、その精神は大事にしてほしいですね。ただし、ボランティア精神だけで生き残るのは難しいので、基盤となる産業があるうえで、私欲でないところで貢献したいというマインド、質実剛健の気質が大事だと考えます。

多くの北九州市の事業者は、地域にとらわれずビジネスをしているので、極端なことを言うと北九州市でなくても生きていけます。大手の市内を牽引するような企業は、本社を東京に置いている企業も多いのが実情で、地域への関心が希薄になってきているように感じます。一方で、福岡市は内部向けの消費が大きいので、まちの活性化に気を遣っている印象です。

しかし、私は地域貢献も大事だと考えており、社業に直接的な影響はなくても、地域の発展に焦点を当てて取り組んでいきたいと考えています。北九州市に本社を置いているのは、ここで創業し、事業を営んできた恩義を感じているからです。

「具体性ととがりを」

ビジョンというからには、皆が「共感できるか」が大事です。今後は施策として、具体化し、とがらせていく必要があるでしょう。事業会社の役員の任期は基本的に1年なので、1年で結果を出さなければなりません。マイルストーンを置いて、ロードマップを示していく必要があります。それは、抽象的なものでなく、また万人に受けが良いものでもなく、「とがらせること」が大切です。

17. 奥山 由布子氏（有限会社シロヤ 代表取締役社長）

「北九州市は、感動できるもの・心の琴線に触れるものがあるまち。」



奥山 由布子（おくやま ゆうこ）

1946年北九州市八幡西区生まれ。

2000年より父の後を引き継ぎ、(有)シロヤ代表取締役社長に就任。2023年現在に至る。

小唄 瓢派師範。

瓢千玉（ひさご せんぎょく）。

2009年より3代目家元の手ほどきをうける。

「シロヤと北九州市の歴史」

シロヤと北九州市の歴史を絡めながらお話しします。父が昭和25年に創業してから、73年になります。その当時、北九州市は製鉄所の隆盛もあり、福岡市よりも経済的に豊かでした。父は戦争に行き、ひもじい経験をしていました。戦後は食べ物が多くなく、“ギブミーチョコレート”に代表されるように、悲しい時代でした。父はこの経験を踏まえ、衣食住の中の“食”をどのように支え、幸せに貢献していくか、ということに挑戦しようと起業しました。その頃銀座では木村屋のあんパンが流行っていて、それをヒントにシロヤでは餡ではなく練乳を入れようとしたことがサニーパンの始まりです。

私は昭和39年に黒崎店ができた際に生まれました。高度経済成長期の頃は、当時製鉄所の祭りであった「起業祭」の影響力がすごかったのですが、そこにシロヤも出店したことで爆発的な人気となりました。

「北九州市民の持つ魅力」

北九州市民は人情深くおらかで、裏表がなく、頑固で一本気。松本清張氏に始まり、内村航平氏など、北九州市出身で活躍している人も多いです。北九州市の為に、もっと大きくなる、ということを書いてくれるアーティストの方

もいます。北九州市上下水道局によるカンボジア・プノンペンへの支援には感動しました。北九州市にゆかりのある中村哲氏のように魂の質が高く、信念があり、人の為に尽くす人が多いと感じています。

「ノスタルジックの上に新しい物語を」

且過市場が素晴らしいと評価されているのは、ノスタルジック・なつかしさが魅力なのだと思います。火災で一部が消失したときはとても心を痛めましたが、これらの歴史の上に新しい物語を作っていくことが必要でしょう。

その他の魅力として、特産物・ふぐ・ウニ・かしわ飯等、名物もたくさんありますが、福岡と一括りにされてしまうことが多いと感じています。北九州市には、名物を集約したような核となる、大きな施設が必要ではないでしょうか。

「若者の成長を応援したい」

北九州市内の大学生をはじめとして、若者・Z世代の話を聞く機会がありますが、SDGsに興味がある人が多いです。当社も紙ストロー導入やレジ袋削減等の取組を行っていますが、良い傾向ではないでしょうか。

小倉城竹あかりのイベントで、ボランティア

として参加している大学生と話をすることがありましたが、ほとんどの学生さんはボランティアで終わってしまうことがもったいないと感じています。彼らにはボランティアを通して仕事に結び付けてもらいたいですね。「集団」から「個」へということで、個人事業主になりたい子たちを市としても応援してほしいと思っています。

若者には人数が少ない分、突出してもらいたいです。若者の中から、優しく、心の美しい方に政治を担ってほしいとも思っています。

「高齢者にも活躍してほしい」

高齢者についても、元気な方が多いです。相見する方は年齢の高い方が多く、頭が固い方もいますが、彼ら自身がそれではダメだということを自覚しています。元気な高齢の方にはまだまだ活躍してもらいたいです。高齢者の強みは経験があることです。持っている経験を活かし、90歳からでも身体が元気であれば、もう一回事業を立ち上げることも可能ではないでしょうか。

「直接のコミュニケーションが大事」

SNS やオンライン会議などデジタルツールで事が済ませられる時代になってきていますが、直接のコミュニケーションは絶対に必要です。コロナ渦で感じたと思いますが、すべてオンラインでは心が殺伐としてしまいます。直接コミュニケーションを取り、ハートに響くものがないといけません。人との直接の触れ合いには温かさがあります。

小倉のまちはノスタルジックで懐かしく、未来の姿もそれに沿うようなものであるべきです。当社の小倉店の改装も、これまでの店舗の雰囲気を出しながらも新しいショーケースにしようとしています（現在は改装完了）。今度

創業祭を実施しますが（実施済）、その際も自身が出席し、お客様と直接のコミュニケーションを取ろうと思っています。

AI の活用にしても、人はふとロボットにも話しかけてしまうことがあるほど、人間力とはコミュニケーション力であると感じます。明るく元気に、その人と話していると楽しくなると感じられる人が北九州市には多くいてほしいですね。

「これからも住みやすいまちであり続けてほしい」

北九州市は住みやすいまちをつくらうとしていると感じています。全国の方からも北九州市は住みやすいという意見を聞きます。子育て支援や福祉が充実しており、シニアの転入先としても人気が高く、家賃が安いなどなど。政令指定都市として頑張っていると感じていますが、これは引き続きお願いしたいところです。人口は減ってきていますが、東京や関西、さらには外国からも移住してきてほしいと思っています。

北九州市から世界へという方向性には、共感していますので助け合っていきたいと考えています。

「感動・心の琴線に触れる（心を揺さぶる） ものに出会えるまち」

心の琴線に触れるものがなければ、人は機会があっても、なかなか訪れようとまではしません。

突き抜けたもの、パンチが効いているものは、理屈ではなく心に残るものです。何かわからないものが来ても拒まず、多様性を受け入れることが重要となってくるでしょう。

是非、オンリーワンのものがあるまちであってほしいです。